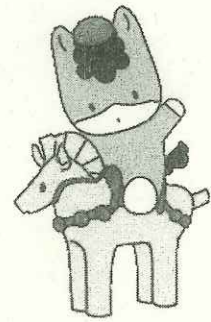


東国文化自由研究レポート



研究テーマ

上毛三石碑

提出日 2021年8月27日(金)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 3組 23番

氏名 野口 智生

「上毛三碑・多胡碑と渡来人について」

1. 上毛三碑（こうずけさんび）とは

高崎市南部地域にある飛鳥奈良時代に建てられた3つの石碑の総称（多胡碑、金井沢碑、山上碑）。国内に現存する平安時代以前の古碑はわずか18例のみで、そのうちの4つが本県にあり、更に3つが狭い範囲に集中しており非常に珍しい、日本三古碑の一つ（多賀城碑、那須国造碑、上毛三碑）。ちなみに本県のもう一つは桐生市新里町の山上多重塔（801年）。



(まっぷ de 高崎より)

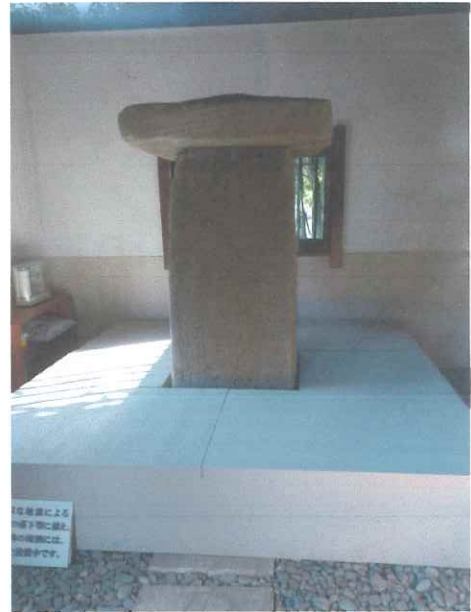
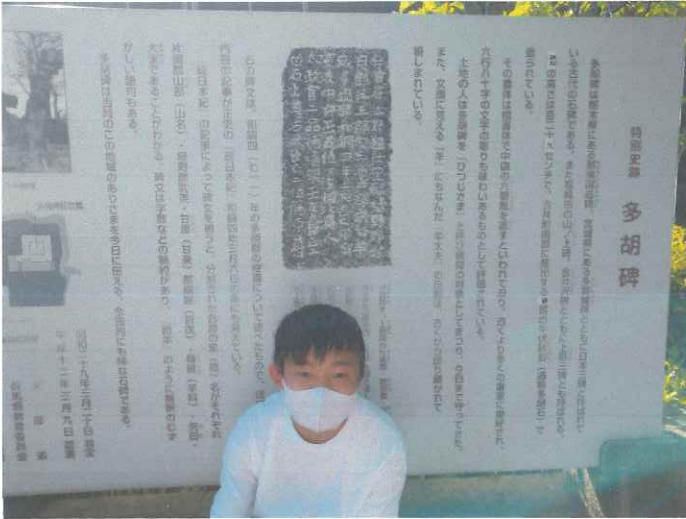
<上毛三碑と日本三古碑>

日本三古碑	建立	目的	高さ	つくり
上毛三碑（多胡碑）	771年	多胡郡設置を記念	196cm	砂岩、笠石・碑身・台石
（山上碑）	681年	僧侶が母を追悼	111cm	安山岩、自然石の形
（金井沢碑）	726年	祖先供養と一族繁栄祈念	110cm	安山岩、自然石の形
那須国造碑	700年頃	国造の業績を称える	148cm	花崗岩、笠石、碑石
多賀城碑	762年	多賀城の修造を記念	247cm	砂岩、自然石の形

○多胡碑について

約1300年前、奈良時代の和銅4年（711年）に現在の高崎市吉井町と山名町辺りで、3月9日に片岡郡・緑野郡・甘良郡から300戸を分割して新たに多胡郡が設置されたことが刻まれている。

石碑は吉井町南部で採れる牛臥砂岩を加工し、
笠石・碑身・台石から構成、
碑文は6行に渡って80文字が楷書体で刻まれている。



○山上碑について

完全な形で残る日本最古の石碑。当時興隆していた寺院（放光寺：現在の前橋市総社町、当時東国で最古・最大級の寺院）の僧侶である長利（ちょうり）が、自らの母「黒売（くろめ）」の供養と一族の系譜等を53文字で述べたもの。自然石をあまり加工しない形状で朝鮮半島の新羅の石碑に類似。

○金井沢碑について

烏川兩岸を勢力とした豪族であった三家氏が仏教の教えに則って一族の繁栄を願い、一族の9人の名前など112文字が刻まれた私的なもの。文面中に地名として歴史上初めて「群馬」が使用されている。

2. なぜ上毛三碑を選んだか

2017年10月ユネスコ世界の記憶遺産（※1）に選ばれた事を高崎駅のイベントで知った。自分は全く知らなかったが、両親にとっては、上毛かるたの「むかしを語る多胡の古碑」として有名だったとの事。それ程貴重な石碑がなぜ群馬県にあったのか気になったため。

（※1）ユネスコ世界の記憶とは、世界的に重要な原稿・書籍や音楽・フィルム・写真などの「記録物」への認識を高め、保存やアクセスを促進することを目的に1992年から開始された。審査は2年に1回で、1か国からの申請は2件以内、日本では7点、世界で427件が登録されている。有名なものではアンネの日記やベートーヴェンの直筆楽譜などがある。

3. 上毛三碑が建てられた時代について

○その頃、日本や周辺の国で何が起きていたか？

645年 大化の改新（豪族中心の政治から天皇を中心とした中央集権的な政治への改革）

中大兄皇子、中臣鎌足らが蘇我氏を滅ぼし、新政府を作った。

663年 日本の水軍が朝鮮半島の白村江の戦いで唐・新羅軍に破れ、百済が滅亡。

676年 新羅が高句麗を滅ぼし朝鮮半島を統一。

701年 大宝律令（刑罰を定める律と、国の政治を行うきまりを定めた令に基づく政治）

が定められ、天皇や朝廷を中心とした中央集権体制が整う。

710年 平城京に都が遷る。

712年 古事記ができる。

720年 日本書紀が成立。

724年 蝦夷が反乱を起こす。多賀城が築かれる。

上毛三碑が建てられた頃、当時の日本の中心だった畿内（朝廷のあった大和、山城、摂津、和泉、河内周辺）では、大宝律令の制定や平城京の遷都など、中国や朝鮮の進んだ文化や政治制度を参考にした改革が行われていた。豪族の私有を廃して国土や民衆は国家に属するものとし、租税徴収や労役のために土地を調査し戸籍を整え、中央から派遣された官僚が地方統治を行うというものだった。

上毛三碑の一つ多胡碑に刻まれていたのも、中央からの命令によって「羊」と呼ばれる渡来人に任せて新しい郡を設置するというものだった。

一方で、山上碑や金井山碑は当時の朝廷の力や仏教が地方にも広がってきていた事、力のある豪族が存在していた事実が刻まれている。

また当時、朝鮮半島では新羅、高句麗、百済といった国々が激しく争い合い、大和朝廷も朝鮮半島に進出し唐や新羅とも大きな戦争をしている。その中で戦乱を逃れるためや、滅ぼされた百済の国の役人や技術者が難民として数多く日本に渡ってきていたという。

日本書紀（奈良時代720年完成の日本の歴史書）によれば、特に666年の百済の滅亡後には、

665年近江国神前郡に400名、

666年東国に2000名、

669年近江国蒲生郡に700名、と記録に残るだけでも3000名を超える人が百済から移住してきた事が記されている。東国とは当時関東地方の国々をさしていた為、東山道を経由した東国の入り口である群馬県にも相当な人数の渡来人が移住してきたと想像できる。

また、現在の埼玉県日高市と飯能市辺りには、716年に高麗郡が設置され、唐に滅ぼされた朝鮮の国である高句麗から東国7か国に渡って住んでいた人々1799人が移住させられたという事です。

→多胡碑に刻まれているのは、そうした渡来人の一人に一つの郡を治めさせたということで、自分にとってはとても不思議に感じた。戦争は戦争として、敵の国の人でも優秀な人や技術は取り入れる柔軟さは、当時から日本人の良いところだったのかもしれない。

またそれほど昔からたくさんの方が日本にやってくる事に驚いた。そうして渡ってきた人と、もともと住む住民の間で問題や争いが起こらなかったのだろうか？ 現代でも移民の問題は解決が難しいものなのに、昔の人は移民や外国人に対し今よりもっと寛容だったのでしょうか？

4. 疑問、推測

多胡碑記念館や参考図書で学ぼうちに、疑問が生まれた為、調べてみました。

①なぜ日本最古の石碑が、群馬県の狭い地域に多く残っていたのか？

・推測1 近くで良い石が採れた？

- × →多胡碑は「多胡石」と呼ばれる砂岩、山上碑と金井沢碑は安山岩で自然の石の形を生かしたもので、どちらも特別な石ではなかった。
多胡石は新生代第3紀（6500万年～200万年前）の海の底の砂が固まってできたもの。
安山岩は暗灰色の日本で最も普通の火山石（マグマが固まってできたもの）。
それぞれ近くの山や川から採れるため、運び出しはそれ程大変ではなかったと思うけれど、他の地域に比べ特別有利な条件がそろっているわけではないと思う。

・推測2 国内でも特に栄えた地域で、石碑などを作るのが流行っていた？

- △ →群馬県は4世紀から6世紀にかけての古墳時代に「上毛野国（かみつけぬのくに）」と言われ肥沃な土壌と豊富な水を生かした農業が盛んだった。5世紀後半から馬の生産が始まりヤマト王権と結んだ豪族が力を持った。そのため、豪族の墓である古墳が多数（13000基以上）作られ、東日本最大級の古墳大国となった。上毛三碑のある地域も当時はそうした発展した地域だった様子だが、特別この地域が発展していたわけではないと思う。
ただ、三碑は建てられた年代が近く、場所も近かった為、最初に建てられた山上碑を参考に自分も建ててみたいと思ったのかも知れない。

・推測3 田舎だったので取り壊されずに残った？

- △ →昔は群馬県内でも栄えた地域だったかも知れないが、現在多胡碑のある辺りは、田んぼなどが広がる田舎風景のため、新しく住宅を建てたり、大きな施設を建てる様な事があまり行われなかったことで、石碑もそのまま残されたのかも知れない。
太平洋戦争後戦後にGHQによる教育改革の一環で、教育施設内の軍人によって建てられた石碑等が撤去された事があったというが、田舎のためにそうした影響も受けなかったのかも知れない。

推測4 昔から地元民に大切にされていた？

- →雨の多い日本では野外の石碑は風化が早く文字は読めなくなってしまう。
現在では雨風の当たらない祠の様な建物の中で保存され、ガラス越しに見ることができる。
特に多胡碑は昔から地元の人々に神様のように祀られ大切にされてきたという。
それは奈良時代の伝説的人物「羊太夫（ひつじだゆう）」（※2）の墓と信じられてきたことが原因だという事だった。
江戸時代には拝殿が作られ、明治15年(1882年)に初代の群馬県令だった「榎取素彦(吉田松陰の義弟)」が内務省に掛け合っって木柵等の修理を行ったり、地元の有志に寄付を募って多胡碑のある稲荷明神神社周辺の土地を買収して整備したりしたとのこと。

ちなみに、県内のもう一つの平安時代以前の古碑である桐生市新里町の「山上多重塔」はガラス張りの祠に納められていたけれども、刻まれた文字の判読も難しく、塔全体がかなり風化が進んでいたことから、上毛三碑はよほど大切にされてきたのではないかと思う。

(※2) 「羊太夫伝説」について

上野国多胡郡で羊の年の羊の日の未の刻に生まれた羊太夫という男の子は、身長2 m半、学問にも武術にも優れた青年となり、父の跡を継いで多胡郡の郡司になった。

「権田栗毛」という稲妻のように速く走る馬を手に入れると奈良の都に毎日お仕えに参上する様になった。ところがある日木陰で休んでいる時にお供の「小脛」の脇の下にトビの羽が生えているのに気づきいたずらで羽をむしってしまった。しかし実はその羽は羊の守り神で、権田栗毛が速く走れたのはそのお陰だったので、その後は毎日都仕えができなくなった。

毎日来なくなったことで謀反の疑いを掛けられ、最後には大軍で攻められる事になってしまった。

羊は何度も朝廷軍を破るも最後には勝ち目がなくなり自害した。奥方やその他の女性6人も自害したが、近くのお坊さんが奥方や6人の死体を7つの輿に入れて葬ったのが「七輿山古墳」(藤岡市落合・前方後円墳 6世紀の古墳として東日本最大級)と地元では言われている。

土地の人は多胡碑を「ひつじさま」と呼び、羊太夫のお墓と信じて神様としてお祀りしてきた。

→「羊太夫」は渡来人であったとの話だけれど、自分が思ったのは渡来人の中でも、羊に関係が深い国の人ではないかと思った。

現在、羊の国といえばニュージーランドやモンゴルを連想すると思いますが、実は世界最大の羊の飼育国は中国(2位オーストラリア、3位インド)でニュージーランドはトップ10にも入らないそうです(人口や国土面積の違いから?)。中国はモンゴルの影響もあるのか、昔から羊を食べる習慣があるおかげで羊の飼育が盛んなのだそうです。

そうするとやはり「羊太夫」は中国やモンゴルからの渡来人で、日本の古来種でなかった羊を連れてきたり、日本人が食べなかった羊料理の話を良くしていたせいで、周りの人から羊太夫と呼ばれる様になったのかも知れないと想像しました。

以上のいくつかの理由が重なって、特に「羊太夫」の様な不思議な伝説と結びついた結果、日本国内でも貴重な石碑が奇麗に残されたのだと思いました。

<まとめ>

自分が住む群馬県に、これほど歴史的に貴重な石碑や古墳、それにまつわる伝説などが残されていたことは大変な驚きでした。

同時に奈良時代という早い時代から群馬が発展し、当時としては先進的だった石碑として未来の人に自分達の繁栄を伝えたいという意識を持ち、後世の人々もそれを大切に守り伝えてきた事はとても素晴らしいことだと思います。

自分たちも同じようにこういった遺跡や伝説を守り伝えていかなければならないと思いました。まだまだ群馬には貴重で興味深い歴史が数多く残されているので、これからも学んでいきたいと思っています。

<参考としたもの>

多胡碑記念館

東国文化副読本

読む日本の歴史2 古川清行 あすなろ書房

東国の古代地域史 関口功一 岩田書院